



第23回

全国高校駅伝女子・仙台育英

※2021年12月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

京都市で2021年12月26日に行われた女子第33回全国高校駅伝競争大会（毎日新聞社など主催）で優勝した仙台育英（宮崎）の3区、山中菜摘選手（3年）は3月下旬に左足を疲労骨折し、1時は陸上を辞めようと考えた。しかし監督や仲間励まされ、懸命のりハビリを続けて復活。この日が今年初めてのレースだったが、安定した走り区間賞に輝いた。

都大路では4区を走った1年時に区間賞の走りで優勝に貢献。2年時は1区で3位と力走した。だが、今夏の負傷後は再び走れるようになる気がせず、1カ月ほど悩んだ。「そこでやめたらもったいない。続けられるから」。金石慶太監督にそう励まれてりハビリを

始めたが、他のメンバーたちのタイムが伸びていく中、自分が走れない悔しさとの葛藤は続いた。

前を向かせてくれたのは、同じ2年生で1区を走った米沢奈々香主将だった。「優勝を目指して頑張ろう」「（中山選手が）一番頑張っているから、一緒に全国に行こう」。自分を信じてくれる言葉は大きな力になった。「できることはやろう」。金石監督に右足の状態を見てもらいながら自転車やプールでのりハビリを続け、仲間のサポートも務めた。

10月上旬に本格復帰を果たし、他のメンバーと一緒に練習を再したのは11月。「最後の宮古大路でチームに貢献する走りをする」と思い続けてきた。目標はただ一つ、

19年以来2年ぶりとなる優勝だった。

そうして迎えたこの日。「きつくなるのは当たり前だから、最初から積極的に行こう」。そう決めて走った。向かい風もあって2キロを過ぎてから少しペースが落ちたが、ラスト1キロで取り戻した。

「ナイス!」「頑張ったね」。レース後、仲間たちと抱き合った。

山中監督は「都大路にかける思いが人一倍強く、陸上に取り組む高校生の中で一番努力してきた」とたたえ、「最後に神様がほほ笑んでくれるだろうと信じていた」と語った。「優勝というかたちで終われて本当によかった。リハビリを頑張ってきてよかった」。安堵^{あんど}で流した涙には喜びもあふれていた。